

第二部 全体討論

永井：では、ご質問等にお答えしつつ全体討論に移りたいと思います。まずは頂いたご質問につきまして各報告の先生にお答えいただきたいと思うのですが、こちらに届いているものも含めまして順番に読ませていただきます。

まず一つはオンラインからの質問です。「現在、韓国も日本も整形もいとわない過剰なルッキズムが恋人や結婚相手選びに影響していると感じますが、どう思われますか。男女とも選ぶ相手に見かけだけでなく、その見かけを維持できるだけの財力・余裕を求めているような気がします」。この点につきましては千田先生どのようにお考えですか。

千田：今の若い人たちは大変だなと思います。SNSが発達していますので、自分が付き合っている相手の情報の拡散のスピードが全然違いますよね。今までは個人的に「付き合っている人があるんだ」と言いますと「写真見せて」というところでとどまっていたものが、今の若者たちはインスタなどで、それこそいろいろなものを見て「こんな人と付き合っているんだ」というようなことを言われますので、本音では仲間との承認をすごく考えるのです。「いくら好きでもこの人と付き合ったら仲間の中で自分の地位が下がるって思うと嫌ですよ」と、結構真面目に言ったりするのです。

今、彼らはルッキズムはいけないという気持ちがあると同時に、外見を磨くというのは属性による差別ではなくて、財力も含めて獲得するものだとすごく思っていて、自分の努力の結果がルックスだからそれは評価されても仕方ないという考え方も一方で持っています。パートナー選びに自分のルックスを維持できるようなパートナーを求めるというのはあるのでしょうかね。その辺りはまだ調査していませんけれども、全く関係ないわけではないかなと思います。

永井：ありがとうございます。確かに整形といいますとまだ日本では特殊という気もしなうはなすけれども、例えば体を鍛えることなどを含めると割と広い世代でもそういった側面はななくもないことかなとも思いますし、そういうのはきっとあるのでしょうかね。

千田先生にまた幾つもお質問がありまして、もう一つの質問は「セフレの若者たちは、その後、結婚していくのでしょうか」ということと、「その経験はパートナーとの暮らしの学びになるのか」ということですね。一つずつお願いします。

千田：どうなのでしょうね。ただ、セフレのような曖昧な関係の居心地の良さを知っている人が、周りに承認されて結婚式を挙げて子どもをつくるというプロセスを心の底から楽しむのかということ自体は知りたいことだと思うのです。

私はこの調査を見て、とにかくキーワードは「面倒くさい」だと思いました。フォーマルな関係が面倒くさい、彼氏／彼女がいることは面倒くさい、お金がかかるし面倒くさい、予定も合わなくなるし面倒くさい、友達と遊ぶなくなるから面倒くさい、というところが多いのです。ただ、周りのみんなが結婚して遊んでくれる友達がいなくなりますと、諦めて自分もその面倒くさいものに入っていくのかもしれませんが、けれども、独身の友達がどんどん増えていきますとその中で結婚しなくても性的な関係も自由な交友関係も楽しさもさまざまなものを賄うことができます。

しかも、金先生のお話を聞いて驚きましたけれども、それこそ塾代もかかりますし、いろいろなお金もかかって子どもが自分の自由を制限するものになった時に、この人たちの

立場になれば、どうでしょう。結婚を選ぶインセンティブは、今までは最終的に子どもが欲しいだけだったところが、子どもにもすごくお金がかかることもわかり、最近は SNS で子育ての真実がすごく明らかになっているところを見ますと、なんとなく夢や希望を持ってふんわりした気持ちでは飛び込めないものになっているのではないかという感触があります。

永井：ありがとうございます。うんうんとうなずいていらしたので他の先生もこういったことに関連してお話していただきたいと思うのですが、今、おっしゃった話や金先生のご報告などでも「面倒くさい」というのは若干重なっている部分がありまして、経済的な原因以外にも面倒くささがあるのではないのかなと思います。

昔は恋愛はいいけれども結婚は面倒くさいからしないといったものが、今の若い人たちは、恋愛にも、契約といいますか、実は恋人に対しての規範がすごく強くて、恋人関係がルーズになっているというよりは、それを守るが故に別の例えばセフレや友達という曖昧な関係に向かっている、恋人を挟んだロマンティックラブ・イデオロギーにもならないといえますか、結婚相手探しが長期化しているというよりも恋人へのハードルが高く、面倒くさいのかなという感じはしますね。面倒くさいということやコストが大きいということにつままして、金先生はどのようにお考えですか。

金：おそらく、韓国でもほぼ同様の状況が見られるのではないかと思います。先ほども申し上げましたが、「幸福とは何か」を尋ねた際に、以前は「一緒にいること」や「愛すること」といった回答が多く見られました。しかし最近では、「食べること」や「おいしいもの」といった回答が増えています。これは、誰かと一緒にいること自体が、もはや自分にとって幸福の源ではなくなっていることを示しているのかもしれませんが。

まずは自分が就職し、安定した仕事を得て、自分自身が幸せになることが最も重要だと考える若者が、韓国社会でも増えているように感じます。

また、先ほど千田先生がおっしゃっていた「ルックス」の話に関連して、韓国では整形手術が非常に一般的になっています。たとえばソウルの江南地区では、道路沿いに整形外科の建物がずらりと並んでいる光景が見られます。整形手術を受ける理由も、必ずしも「より良い相手を見つけるため」ではなく、「より良い職を得るため」という側面が強いのです。つまり、就職活動においてルックスが一種の“スペック”と見なされ、見た目がよくなければ面接で不利になるという認識があるのです。このような事情は、日本との違いとして注目すべき点ではないかと思います。

永井：ありがとうございました。

今のように、例えば、恋人だったり、仕事に就くための基準だったりというのですかね、スペックを上げていくことが必要になってきていることもありますね。先ほど千田先生のご報告にもあったように、結婚をしたい人たちは子どもを持つという理由が大きいかなと思います。子どもを持ちたいという意欲が低下し、それに伴って結婚意欲も低下したとも考えられます。2000 年代ぐらいに私が子育て支援、両立支援としてスウェーデンなどの諸外国の家族政策を紹介していたのですが、その時期の日本の諸制度に比べて、現在の制度、現金給付・現物給付もかなり整い、紹介していた海外の制度に比較しても引けを取らなくなってきました。しかし、子育ての負担感は大きいままです。それがなんとなく家庭への子育てのハードルが上がっていたり、家庭の重荷がすごく増えていたりする

のではないかという感じがします。林先生のお話は家族への負担の背景にあるものを説明してくださったと思います。児童分野で現場の状況を見ていて親が感じる子育ての負担が上がっているということは政策以外の部分でも見うけられます。また、政策から見ますとかなり押し寄せてきていますよね。それがなんとなくじんわり伝わっているかなと思うのです。それが現場で伝わるといったことは何かありますか。

林：経済的、あるいは心身の負担感はどこに住んでいるかによっても非常に違うかと思うのですよね。東京都内ですと恐らく半数以上の子は中学から私学という地域と公立がベースになっている地域との経済的な負担感とは全然違うでしょうし、身体的あるいは精神的な負担感もどこに住んでいるかにより非常に異なっているかと思います。

都市部は経済的なコストだけではありません。地方から来られている方も多く、そうしますと実家が地方にある方々も多いです。一番大きいのは、母方の実家が近在しているかどうかというあたりで養育の負担感はかなり違うと思うのです。市区町村レベルで相談支援や情報提供以外の具体的な子どもへの直接的な支援が充実しているかといいますとそうではないと思います。その象徴として子育て罰のような言い方もされたかと思うのですけれども、持つことの不公平感はすごく感じられることかなと思います。

永井：両立支援という面で両立できるようにはなったのですけれども、逆に仕事も育児も両方やらなければいけなくなったということも確かにありまして、そういう意味でいいますと、仕事を続けることはできるようになりましたけれども楽にはなっていないかなという感じは確かにありますね。そして、子育ての中で求められていく水準もどんどん高くなっているかなと思いました。質問からは脱線してしまったのですけれども。

林：1990年代ぐらいに所属していた大学院に韓国からの留学生がいたということで韓国の家庭に結構お邪魔していました。かなりベビーシッターやお手伝いさんが日本以上に一般の家庭を含めて活用されている印象を受けまして、留学生の友人も5人きょうだいの韓国の留学生のご家庭にお邪魔すると、養育を一手に母親が引き受けている形ではなく、お手伝いさんなどが手伝っていました。最近、韓国の施策の動向の中で外国人のお手伝いさんという動きがある中で、日本はどうしても家庭に外部の者が上がることにに対するハードルの高さは韓国以上にあるかなと思っていたのですが、現状はどのようなのですか。

金：確かに、そうした家庭が存在するのは事実ですが、それが社会全体において一般的であるとは言いがたいと考えます。地域や家庭の経済状況によってかなりの差があり、むしろそういったケースは、比較的経済的に恵まれた家庭に多く見られるのではないかと思います。

現在、韓国では外国人労働者を受け入れてベビーシッターを依頼する家庭も見られますが、これについてもいくつかの社会的な課題があります。たとえば、外国人労働者に対して国内労働者と同等の賃金を支払うべきかどうかについての議論が進行中です。

そのため、現時点では外国人ベビーシッターの雇用は一般的なものとは言えず、むしろ一定の経済力を持つ家庭が中心となっているのが実情だと考えられます。

永井：ありがとうございます。ベビーシッターなどの利用が多いアジアの国では、女性の機会が均等といいますか、女性の昇進なども進んでいることもあります。一方で、ケアワーカーの人と利用者の間の格差も出てくるなど、いろいろな問題点もあるのかなと思いますけれども、お話を伺いまして家庭に養育機能を限定していく社会的な圧力が逆に家庭

から若者が離れていくところともつながっている気もしました。

金先生へのご質問で、先ほど私のほうでも農村の結婚問題を冒頭で申しましたが、韓国においても農村の男性の結婚難が続いているのかということです。

金：韓国国内では、特に若い女性の間で農村部に住むことを敬遠する傾向が強く見られます。その結果、農村に住む男性の間では、外国人女性との結婚が増加しています。実際のデータによると、結婚を目的として韓国に移住した外国人は、2018年に約15万9,000人でしたが、2022年には16万9,000人に増加しています。

また、このような移住の背景には、韓国の最低賃金の引き上げも大きく関係していると考えられます。現在、韓国の最低賃金は中位賃金の6割以上となり、ヨーロッパ諸国並みに達しています。このため、韓国は「稼げる国」として注目され、中国の朝鮮族やベトナム人を中心に、多くの外国人が韓国に移住しています。

しかし一方で、結婚後すぐに配偶者が行方をくらますケースも少なくありません。その結果、不法滞在者の数は2016年の約20万人から、現在では40万人を超えるまでに増加しています。このように、結婚移民の増加はさまざまな社会的課題を引き起こしていると言えると思います。

永井：単純な結婚難の問題というより労働力移動のお話ですかね。

金：そうですね。

永井：今、どこも人口減少の問題で外国からの労働力の奪い合いという状態ですから、韓国で賃金水準を上げたということはニュースでも流れてきましたけれども、結婚で入国しても実際にはいなくなってしまうということもあるのですね。日本でも外国人の花嫁の方が一時期かなりいらっしやいまして、地域の生活になじめなかったり、いろいろな問題があったことと似ているのかなと思いました。ありがとうございます。

林先生にご質問が来ているのですけれども、行政の結婚支援セミナーの中に独身の子を持つ親世代のセミナーが増えていて、30～40代の独身の子どもに親はどう対応していけばいいのかということなのです。例えば、ひきこもりの話などもあるでしょうし、成人した子どもへの親の不安というのですかね、心配などにつきまして、児童ではないのですけれども、ご存じのことはありますか。

林：そもそも30～40代の人が経済的に自立しているのか、親の年金で暮らしているのか、ひきこもっているか、社会とのつながりがあるかということによって大きく異なってくると思うのです。30～40で経済的に自立していて実家にいる子がなかなか出ていかないという状況に困っているなら早く1人暮らしをさせればいいわけです。結婚ではなくて家から出てほしいということなのですかね。

千田：ただ、先ほど林先生が少しおっしゃったことと関連させていきますと、これは、親の責任が増大していることの裏返しといいですか、最近の親の息苦しさは、現金給付など、さまざまな子育て支援などがあって、労力としては軽くなったはずなのですがそれでも、親がいつまでも子どもに責任を持たなければいけない社会になってきたと思うのですね。50代のひきこもりなどでも「親がこういうふう育ててしまったからだ」と言われます。罪を犯しても「親の育て方が」と言われたりするの、かつては少年犯罪でしたらどういう育て方なのかと責められるという話だったと思うのですが、最近では30～40になってもまだ「親の育て方が」と言われます。

私に関心があることのひとつに、最近、DV 被害者のお母さんが子どもを守れなかった、虐待を止めなかったということですごく非難される傾向があるのですね。これはアメリカのほうが先にあったのですけれども、虐待に適切に介入できなかった罪がありまして、子どもに対して殺害や、けがを負わせた人よりも、守らなかったお母さんのほうにどんどんさまざまな罪が加算されていってお母さんの責任が重くなってしまうことがあるのですよね。

ですから、最近は親責任がみんな息苦しくて、それこそ障害のある子どもを産んだというのも家族が全部抱えていかなければいけないわけではないですか。それを適切に地域に開いていくといいますか、そういう必要はありますね。うちの子が結婚できないという話だけではなく、すべてが家族の中で完結し過ぎているのではないかなという印象はありますよね。

親ガチャという言葉がありますけれども、今度は親が子ガチャと言い出したりします。そういうガチャの要素をすごく減らして、それこそピケティやエスピン＝アンデルセンなど、早期の教育、要するに親が関わらなければ関わらないほど格差は減っていくのだという人もいます。

先ほど里子に來たのが小学校4年生でもっと1年生からだったらという話がありました。もっともっと早くから関わっていくことによって、さまざまな子どもに対する虐待なども含めてが、防止されるだけではなく、認知機能の上昇や家庭に由来する格差を減少させられるという話を考えますと、自分の子ばかりではなく、さまざまな地域に開かれていくことが必要なかなという気がしますよね。

永井：ありがとうございます。

今回は「非婚・少子社会への視座」ということで大きなテーマですので、この場で結論・解決策は出ないと思います。経済的な困難や意識の変化、女性が生きにくい社会であることなど、日本でも少子化対策の中で様々な問題が盛り込まれてきました。解決できていない部分は、意識の問題、あるいは、本日議論されている「面倒くささ」につながる部分があるのか、それとも抑圧から來たあるいは負荷が大きいことによるものとは異なった「面倒くささ」なのか。完全には分解できないと思うのですけれども、「面倒くささ」については皆様のご報告の中に共通しているところがある気がしまして、若者の考え方の根本にある「面倒くささ」とつながるものということでご自身の研究から見てコメントを頂けますか。

金：直接的な因果関係があるとは言い切れませんが、先ほど林先生や千田先生もおっしゃっていたとおり、東アジアの出生率がヨーロッパなどに比べて低い理由としましては、親の過干渉が影響している可能性があると考えます。つまり、親が子どもの教育や生活に過度に関わりすぎる傾向が強く、それを見て育った子どもたちは、「自分も親と同じように子どもを育てなければならない」と感じ、その責任の重さに大きな負担を感じているのではないかと思います。このような心理的なプレッシャーが、「子どもを持つことは面倒だ」「今の自分の生活を維持したい」といった考えに結びつき、結婚や出産を先送りにする、あるいは避ける傾向に繋がっている可能性があると考えられます。

現在、日韓両政府とも、結婚や出産、少子化の問題を解決するために、主に経済的な支援策に力を入れています。しかし、実際にはこうした支援の多くが公立学校を基準とした

ものであり、現状と必ずしも合致していないという課題があります。

というのも、最近では多くの家庭が子どもを塾に通わせたり、私立教育や学校外での教育にも力を入れています。そのため、経済的支援をいくら拡充しても、すべてをカバーするのは難しく、支援には限界があると言えます。つまり、経済的支援だけでは根本的な解決策とはなり得ないのです。

したがって、子育て世帯に対する支援だけではなく、そもそも「なぜ若者が結婚しないのか」という根本的な理由を明らかにする必要があります。そのうえで、未婚の若者に対する具体的な支援、たとえば住宅支援や安定した雇用の確保などを実施する必要があります。

また、親世代の意識改革も必要です。親が子育てや教育に対して過度な期待や関与を控え、社会全体が子育てを支える仕組みを作ることが重要だと考えます。そして、政府も支援のあり方を再考し、より現実的かつ効果的な政策へと転換することが大事です。

永井：ありがとうございます。

林：親側が責任を負うという側面だけではなくて、多分、子どもは親の作品であって、結局、評価の一番の対象になっていくのです。親側が子育て、あるいは、子ども以外で承認を得ることはある層にとっては非常に難しい面がありまして、子どもが褒められることが親の承認欲求につながっていきやすい社会になっています。要は子ども以外、あるいは、子育て以外の生きがいをいかに女性が維持していくかということが重要なのかなと。とにかく経済力と働き続けるところがあって初めて結婚に向かうのだらうなと思います。

そうすると晩婚化でなかなか妊娠さえ難しくなっていくのは当然の成り行きかなと思います。

千田：面倒くさいというのは、選択しなければいけない面倒くささがたくさんある社会だと思うのですね。多分、私の母は、「腰掛け」で就職して24歳ぐらいまでに職場結婚をして子どもを2人産むという典型的な近代家族のライフコースをたどっているのですけれども、母はすごく不満感がありました。「私も大学に行っていたらもっと違う人生があったかもしれない。パートにすら出られなかった」などいろいろなところがあるのですよ。

ただ、現実には選択はないのですね。ですから、他の人生があったら良かったなというのは願望ですけども、ただただベルトコンベアの上に載っていきますと自分の人生がある。高度経済成長の波がありましたので前よりはどんどんいい暮らしはできていくという社会だったと思うのですが、今はいろいろと選択しなければいけない社会になっていて、その選択が正しいか正しくないかということもよく分からない時代です。

女の人も「結婚もしたいかな。でも、働かないと駄目だよな」ということで、やりたいこと・やらなければならないことはさまざまにあるのですけれども、本当は全部できないのですよね。男並みにすごく働いて子どもが2人いて完璧に専業主婦のように育てて、所帯やつれしていなくて、すごくきらきらして美しくてぴかぴかしているというような3人分ぐらいの人生を1人でしなければならぬとすると、何かを捨てて何かを選ぶという作業をしなければいけないのですけれども、選択すると選択しなかったものがうちの母の幻想とは違ってリアルに「私、あの時、結婚して仕事辞めなければ彼女みたいに活躍していたのかもしれない」「子どもがいなかったらこんなに身ぎれいにできるんだ。私には

できないのに」と、さまざまな後悔といいますか、やらなければいけないことがいっぱいでも本当に面倒くさいなという時代の空気は感じますね。

あと、東京で子育てをするのはすごく大変なことで、私も子どもに中学受験をさせたのですが、積極的というよりはすごく消極的な受験で、言い方は非常に難しいのですが、大部分の人が受験をするから受験しないと、地元に進学する人が少ないから受験させなければいけないという東京の事情があります。でも、そうすると受験は適当に関わることはできなくて、これほど小学生が勉強しなければいけないのかと私は本当にびっくりしました。これほど小学校で詰め込んだら脳細胞が壊れるのではないかなと思っていました。

エリートコースをたどってきた私の同僚の先生も「私は、有名進学校に入った後、記憶力がゼロになりました」と言いまして、その後、きちんといろいろと立派に研究者をやっているんですけど、「あの時がマックスでしたね」とおっしゃっていました。それこそ課金ガチャや課金ゲームのような感じのことをおっしゃる人もいまして、いくら課金して子どもがどれぐらいの達成をしたら、元が取れたといいますか、ゲームとして成り立つのかなとおっしゃる方もいまして。多分、それは優秀な方なのでしょうけれども、私は子どもにのんびりとゆっくりとそのペースで生きていてくれればいいなと思ったのですが、そのためにも課金しなければいけないといいますか、すごく勉強させたりしなければいけないのです。東京という土地柄、場所や区によると思うのですが、地方から来るとこれほどクレイジーなことをしなければいけないのかと思うのと同時に、まだ子育て支援なども区や市によって本当に全然違うという格差を感じます。うちの市は老人には手厚いのですが子育てには全然手厚くなくて、どんどん支援が削られていくのに割と裕福な区に住んでいらっしゃる方はいろいろなクーポンが来て「こういうこともできる。ああいうこともできる」と聞いていると、同じ世界に住んでいるとは思えないという格差もあります。

でも、それは事前には分からないといいますか。そのような地域の格差などもあります。とにかく選択しなければいけない。そして、その選択の責任を自分が持たなければいけないということはすごくしんどくて面倒くさいと感じます。

永井：ありがとうございます。育ててみたらとても面倒くさかったということはあると思いますし、昔に比べて子育てにおいて処理すべき情報量もすごく多くて大変というところもありまして、面倒くさそうということは分かるのですが、まだ実体験をしていない若い人たちがいろいろとそれについて面倒くさいなと思っていくところにつきまして、多分、学生生活や就職活動など、さまざまな活動において、今、千田先生もおっしゃった選択をずっとしていかなければいけないということの表れもあったり、恋人の規範が非常に強くなったり、昔と人間関係のルールが少し変わってきたところもあるのかなと先生方のお話を聞いて感じました。

このシンポジウムだけで何が分かったかということは難しいことではあるのですが、今回のシンポジウムでいろいろと出た先生方のご意見などを踏まえ、シンポジウムに参加してくださった皆さんにもお考えいただいて、いろいろなところでご意見などを発信していただければと思います。

このまとめをもちまして閉会の言葉とさせていただきたいと思います。皆様、本日はどうもご参加いただき、ありがとうございます。